

# 甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻(中)

米田明美  
中葉芳子

本稿は、甲南女子大学蔵「光源氏一部連歌寄合之事」(全三冊)の翻刻と解題を記す。

該本は、本大学図書館に残された売買記録によると、昭和四十八(一九七三)年頃に古書店から購入されたもので、昭和三十(一九五五)年三月に古典文庫により『良基連歌論集 二三』(岡見正雄)として翻刻されている本の原本である。古典文庫には、書写年代も含め詳しい書誌なども記されておらず、また朱点・割注の取り扱いや翻刻誤りもある。古典文庫に掲載されてから長く所在不明になっていた故、諸本分類における該本の取り扱いも困難であったようだが、この度の調査により書写年代や伝来を含め、新たに判明した点もあるのでここに詳しく紹介したい。

今回は、該本の伝来と前号からの続きの翻刻(二冊目 明石(藤裏葉巻)を示す。

## 一、伝 来

(1) 本書は、一冊目墨付き一丁表右下と三冊目の五三丁裏に、**燕安**という蔵書印が押されている。燕安とは「燕安居」と号した小笹喜三(おざさきぎょう)のことであろう。小笹は、『平安人物史短冊集影』(一九七三年 思文閣)などの著書があり南画や書に造詣が深く、日本文化財鑑定会会長、陽明文庫の前主事などを務めた人物である。本書は、小笹喜三旧蔵本に相当する。故に「源氏小鏡」の伝本分類で、小笹喜三本と古典文庫本と両者の名前が挙がっているが、実は同一伝本であることが

判明した。該本には付属文書が二葉付されている。一葉は『源氏小鏡』に関する研究調査メモのようなものであるが、もう一葉は本書の来歴等を示す小笹喜三自筆の文書で、研究史の一端を示すものと考えられるので、ここにその内容を紹介したい。用紙は市販のA4(四〇〇字詰)原稿用紙二枚に書かれ、推敲訂正の跡甚だしく判読し難い箇所もあるが、できるだけ解読してみた。

## 「古寫本「源氏小鏡」附言

この三卷本はもとより標題<sup>びょうだい</sup>あらずして開卷初行に「ひかるけんしいちふ・れんかよりあひの事」と見ゆ。これなんいはゆる「源氏小鏡」のいと古きさまなりかし、今これを万の源流の流布本と對照するに、大いにたがゑり、引歌及び假名遣の異同いちじるしく、部立(紅梅の次二)盛行以前にさかのぼりて、さればにや、書写の年代も足利氏の中期を下らざるいと珍らかなる貴重本とぞ謂つべし。この本の成立は、青表紙本の系して、河内本系などの古き系統のに拠れるもの。

予これを夙に獲て永らく秘めおけりしを、昭和十五六年の交なりしかとおほゆ、京都大学国文学研究室に望まれて寫影のために一とたび貸し出したりしことのあるを、そののち廿五年の秋、これも研究のためにと望まれて、知友・岡見正雄氏のもとに久しく貸し託しおきたりしを、今年にいたり、ほとんど忘却のうちに、これを返し戻されつるなり、本の体裁の見違へるばかりやつれたるを見て、驚き且つ、これが内容の、いかばかり研究検討を加へられつらむかと、おほるげながら想いめぐらしつ、も、ともかくなん、筐をつくらせてこの事由をした、めおくものなり。



乾郊なる燕安居にて篠喜三、時二昭和卅七年八月の上旬。

○宇治十帖のうち 引歌の異同例

やどり木の巻

- ・やとり木を思ひ<sup>流布本</sup>しらすはこのもとのたひねもいかにさひしからまし
- ・しもにあ<sup>へ</sup>えずかれにしその、きくなれとのこりのいろは<sup>あせすもあるかな</sup>かわらざりけり

浮舟の巻

流布本（寛文板小本）中間二欠文多く見ゆ

- ・うちはしのなかきちきりはた<sup>くち</sup>えせしをあやふむかたにこゝろさはくな
- ・なみこゆるころともしらす<sup>す</sup>ぬのまつまつらんとのみおもひけるかな

巻末

- ・い上五十四てう、此ほかすもり一卷、さか二巻、しくわん二巻、うばそく二巻、そうつから六十てうなり。」

三、翻刻（明石（藤裏葉））

翻刻に当たっては、

- ・朱筆（句読点・濁点・合点）は、書写当初には無かつたものと考えこれを省いた。
- ・行数および改行については、忠実に翻刻した。
- ・ルビが付されている場合、ルビはそのまま付けた。
- ・小文字の割注については《》で示した。
- ・ミセケチ・重ね書き・補入については、

- ミセケチ <sup>あ</sup>
- 重ね書き □<sup>い</sup>（下の字が判読不可の場合は□とする）
- 補入 補入記号のない場合 あ・う
- 補入 補入記号のある場合 あ○う

- ・「紙」とある場合は、小紙片に字を書き貼り付けてあることを示す。
- ・虫喰いにより判読不可の場合は、□□とし右に「虫喰」と傍記した。
- ・丁の終わりに「」を付して丁数を入れた。」一オ

・寄合語が列挙されている箇所は、寄合語と寄合語の間に空白が入れられている箇所と、入れられていない箇所があるが、それも当該本の特徴と考えてそのままにした。但し、どちらとも判断し難い箇所は、空白を置くことにした。

第十あかし 《あかしかたたくくみなのあたら夜の月げのこむまのまきのとくちは》

これも此まきにけんしすまよりあかしへうらつたひし給へはあかしのまきといふへしかの十三日のあかつきにおきのかたをゆめさめてのち御らんしやりければちいさき舟にのりてはりまのこくしこれをあかしの入道といふ也かの人のもとよりあんなひ申てけんしをよひたてまつりて御むかへに舟をたてまつる此きみゆめうつゝをおほしめし合てさうなくかのうらゑうつり給ふ入道よろこひかしこまりき事かきりなしいつきかしたてまつるそのことはにむかひ舟ふなておいかせう・つたいうらよりおちこれらはすまよりあかしへわたり給ふときのこととは也かくて宮この御すまいにもさまぐちままさりてかやくほととせんすいにていしいけ水やりみつめおとろくはかりなりふるさとのいけみつにおもかけ見ゆるなといふ事もありこれは三月の事也程なく四月にもなりければころもかへの御しやうそく御ちやうのかたひらかへのわさまにてあらためてまはゆきほととてなしかしつきたてまつる此人道いみしくかしつくむすめ一人もちたりわかむらさきのまきにわらはやみのおりきた山にて人のかたり出しむすめなりつねに思ひかしてきてなへてならすかしつきよのつねのむこをはとらしとおもふ所にかのひかるけんしすまのうらにしつみ給ふをきゝてい

「二オ

かにしてかこゝもとにうつしたてまつりむこにとり  
たてまつらんとおもふをやすみよしのかみの御あわれと  
おほしめしけんとし月すみよしにいのりきこえきす

まにてけんしの御らんしけんゆめをおなしやうに  
かの入道も見てとりあへす御むかへをまいらせけ  
りされ共いかにしてかいひ出すへきとつゐてをまち  
けるもいとほるけき心せしあるよけんしみやこおほしめし  
二てうのいんのむらさきの上よりはしめてかすくおほしめし  
出し物あわれになれはことをひき給ふにうたうたへ

「二ウ

かねて身つからしやうのことをもちてまいりすゝめたて  
まつるすこくひきすさひ給ひてこれは女はうの

ひきたるこそにつかはしけれとの給ひしをこののはの  
たよりにていひよりたとへは此むすめはひわにやう  
のことなとたくぬなくひきけれはこのひはことを

きかたてまつらはやと申したりしよりけんしも  
ゆかしくおほしめしてつねに文なとかよふそのことには  
かみなり  
くるみいろ こすみうすゝみ かすめしやと

「三オ

おちこち おかへのやと此ことはあかしに付へし

このおかへのやとは入道のむすめをすませし所もお  
やのもとよりちとひかへたてゝおきたりきさてとかく

いひよりてかよわせ給ふむまでもかよる給ふに  
ある夜みやこをこひしくおほしめして

《あきのよのつきけのこまよ我がこふる  
くもひをかけたつかもまも見ん》とよみ給ひしなりさてこ

「三ウ

そ月けのこまといふ事あかしに付く又あかしにくるまといふ  
事ありい中となれはくるまなしとおもふへからすにう  
たうつくりてもちたることありさてこのむすめみな

月の比よりたゝならずなりたりしを御らんしお  
きてけんし八月にみやこゑめし返し給ふ此

うらには三月よりつきの年の八月までおはします

あかしのふたうらに三とせのわかれといふはこれなりさて  
かへりのほり給ふにせんねんみやこのわかれにもお  
とらすおほしめして《みやこ出しはるのなこりにおとらめや  
としふるうらわかれぬる秋》

「四オ

とよみ給ひてなくくみやこへのほり給ふかのむす  
めのこゝろのうちおもひやるへし入道もなこりをお  
しみたてまつりてつかまて御おくりにまいりけんしも  
かたくあわれにみすてかたくみやこのわかれにもおと  
らすおほしめしてなそや心から物おもふらんと身を

うらみおほしけんさてあかしの上の御はらにひめきみ  
出きさせ給ふ松かせのまきに三つにてきやうへ  
むかひよせまいらせてむらさきの上の御こになして

「四ウ

とうくふのねうこにまいらせ給ふあかしの中くふとはこの  
御事也又あかしにとはすかたりと御うことありこれは

あかしのうゑをうきたひのすまいにもち給へるをい  
かにみやこにおもはずにきゝ給はんすらんとおほして  
人のくちよりもれぬさきにとおほしてむらさきの

うゑの御もとへ思ひよらぬゆめをこそみて候へ●うらなき  
とはすかたりにおもひゆるし給へとの給いて歌に

《しほくとまつそなかるかりそめの  
見るめのあまのすさみなれとも》とよみておくり給いしなりこれを  
とはすかたりというなりあかしのことは すま ゆ

「五オ

めのつけ みてくら おふやしま ふな出して うみ  
にますかみ ふるさと あやしきかせ い上あかし

のまきのごとはなりといへとすまの事なり あかし  
なきさのとまや おこない人 たかしほ あぎのた

のみ いなくら ゑ(ころもかへ) あわちしま ことのふくろ

せはき所《こをそたつる  
あまとみつる》かみのしるへ ひは うらはなれたる  
たひころも《うらかな  
しき》こゝろのおに かすめしやと

「五ウ

あいなたのめ まきのとくち ちかまさるする

第十一 みをつくし《みをつくしなわのみそきよみよしの  
いりゑのたつのおもひこのため

此まきをみをつくしといふ事は《数ならて何わのこともかひなきに  
何身をつくしおもひそめけん

この歌ゆへなりけんしみやこへめしかへされてほとなく

もとのくらいにあらたまり数のほかのこん大なこんに

なりないしかけ給ふいみしくさかへ給ふほとにすま

にてかみなりおちかゝり又ゆめのさとしもさまゝす

みよしのかみの御ちかいとおほしめして秋の比すみよしへ

まいり給ふかのあかしの御かたもはるあきことにおや

おさなくより出したて、□<sup>す</sup>みよしへまいらせはるゝ

みやこよりまいり給ふをしらすあかしよりまいり給ひ

たれはまつ御はらひにくるまたてつ、きていみし

きさまなれはたかまいり給ふにかとやすらひてなにわに

ふねさしとめてとはせ給いければうちのおと、のま

いり給ふといへはこと人よりははつかしくかすならす身

のほととおもひてなにわのはらいはかりにてかへりなんと

するにしのひやかに人しらせたてまつりければ

いの心しりのこれみつ御くるまちかくまいりて申ければ

わひぬれはとくちすさみ給ふ此心わほんかに

わひぬれはいまはたおなし何はなる身をつくしてもあはんとそおもふ

といふ心を給ひしかは御よふもやとてつねによふ

いしてもち給ひたるつかみしかきふてす、りをと

り出して御くるまへたてまつるた、うかみに

身をつくしこふるしるしにこ、までもめくりあひぬる何わゑのうち

とよみてかのふねにつかはされければみをつくし

といふことにすみよし めくりあふ なにはへなと

いふ事を付へしさて此まきにあかしの上ひめ

きみうみたてまつり給へはきやうより御めのとなど

「六オ

「六ウ

「七オ

くたさるそのこといわひのおいさきいか時そともな五十日也  
うらにてつみ給ふ事也  
きかけ これらはかのひめきみのうまれ給いししふん  
のおりと心へへし

ならひせきや《せきやとうすきのしたみちわくらはに  
あふさかまてかしけなきは

此まきをせきやといふ事けんしいし山へまいり給ふにせき

山にてむかしうつせみときこえし人のおとこいよのす

けひたちのこくしになりて下しかかりてのちきやへ

のほるにせき山にてあひ給ひしかは人しらすむかしの事を

おほし出てしのひてむかしの心しりのこきみをめして

文ありそのことは せきや しみつ ゆきあふみち みつ

ならぬうみ せきとめかたきなみた そのおりの歌の うみなり

ことはなり これらをとり合ていし山又せき山などに付へし

《わくらはに行あふみちをたのみしも  
なをかひなしやしはならぬうみ  
《たえぬしみつと人のみるらん

けんしはいし山へまいり給ふうつせみはみやこへいれは

ゆくとくるとの心也わくらはとはたまゝの心なりこれら

のことはあふさかに付へし あわた山 しけきなけき

すきのした

ならひよもきふ《よもきうのわけのしくれあまそ、き  
みかさど申せたもとせはくは

このまきをよもきふといふ事わかむらさきのならひに

すへつむ花みめわろく・はなあかき女ほうのためしすくなく

みにくかりしはひたちのみやの御むすめそかし

けんしあわれみ給ひてしはゝたちよらせ給ひし

かともすまの御かたなどにはおほしめしもかへさせ

給はすされともち、みやの御あとをかれはてし

と心をたて、いふかきりなくかすかなる御す

まいにてすみ給いしをすまよりかへり給て

はなちるさとの御かたへさつきはかりにわたり給ふに

さみたれの露ふかくよもきむくらしけきふるき

「八オ

「八ウ

いゑありこれなんひたちの宮と御ともの人と申けり  
「九オ

まこと、おほしめし出、わけ入給ふにしきりに

露しければみかさをさしかけ・御てともの人む

まの・むちしてあまつゆをはらひていらせ給ひてそれ

よりあわれみ給ひてにわのくさ共ひきのけさせて

所〳〵つころはせなとして二三ねんありて二てうのいん

のひかしのたいにうつしてふちしたてまつりし也すへ

て御心かたくしてよろつさし出はみ給ひてかたはら

いたき事おほかりし人なりそのおりの御歌

《たつねても我こそはめみちもなく》よもきふにはむねとむちと  
《ふかきよもきかものころは》

かさとあれたるやときつねなど付へし又よもきふには

すゑつむ花といふ事あり心へへし此すへつむ花の女はう

めのとたりしかししゆとてすゑつむ花にはまさりて

けんしなどの文の返事をもちと人かましきかありしか

すゑつむはなのしたしき人つくしの大二になりて下

しおりこいてつれてきたるししゆもたつ〳〵しき

御ありさまなれはさそふ水あらはとおもひしほとにひめき

みをはうちすてたてまつりきたるにわか御くしのおち

にてかつらをしてもち給へるかいとうつくしくてくしやく

はかりなんありけるをかたみに見よとてこししゆにたひし  
なりこれを心へへし

第十二ゑあはせ 《ゑ合のたき物にはふふちかさね  
すまもあかしもころはへなり》

此まきをゑ合といふ事その比のみかとけんしのふち

つほの御はらにしのひて出き給ひしみやにておほし

ますのちにはれいせんゑんと申このみやは人めにはき

りつほのみかとのとをにあまり給ふみやにてことのほか

にいとをしみにておほしましかは御くらゑにつかせ給ふ

かのしゆしやくいんにはおとなしきみやもおほしまさす

「一〇ウ

とうくうはかりそいとおさなくおはします此御かたの御

よをはけんしよろつをはからゑたてまつり給ふむかし

のあほひの上の・御ち、さたいしん殿せつしやうをせさせ

給ふ何事も御こ、ろのま、にてめてたし御まこのひめ

きみこうきてんにさふらい給ふ又けんしのかよひ

給いしせのみやす所の御はらのさいくうにたち給いし

もおりさせ給いてけんし此さいくふを御こにしてうちへ

まいらせ給へはとり〳〵のおほえにてむめつほと申のちには

きさきに立たまうみかたよろつ的事よりもゑをこのま  
「一一オ

せ給へはかた〳〵よりあつめ・てまいらせ給ひ比は三月十日

なれは大かたのそらもおもしろき比こうきてんと

むめつほとさうをわかちてゑ合ありみかと御らんあり

せいりやうてんのひろひさしに御さをよういしてうち

の御かたはわたらせ給ふ女こたちの御たいくわんにはねうはふ

を三人つ、出されたり心こと・はにそうそきてさふらはる

ひやうふきやうの宮かんつけの御こなんとゑをはんし給ふ

くち〳〵にいとみにしひたりはむめつほなれはけんしの御  
「一一ウ

かたよりすまあかしのふたつのゑをとり出されたりこ

れによりてひたりかち給ふさてゑ合といふこのす

まあかしの二のゑはけんしすまにおはしまししとき

たとへなきつれ〳〵のあまりにいろ〳〵のかみにうら

のけしき山のと、すまいを心のゆく〳〵かきすま

し給へりそれに我か御ありさまをかき給へはいかてかお

ろかならんや此ゑをはわか御物なからあまりにひして

宮こへもちてのほらせ給ふてもむらさきの上にした

にも見せたてまつらせ給はさりしかこのとき  
「一二オ

のけうに出されたりこれそむらさきの上のみつづ

うらみといふ事ひとつに此人の事なり

第十三松風《まつ風にことひきあかし見る月の  
かつらのむかるあまのさえつり》

此まきをまつか風といふ事けんしあかしにて心さし  
あさからす入道のむすめのた、ならすなり給ひ  
しを御らんしすて、月ひすきてみつになり給ふ

あまり国さかひへた、りおほつかなくこいしくおほし  
めしてかのうらゑのほり給へとありしかはあふそらの  
すまひまつしはしはむつかしくとてかのあかしの上のは、  
にうたうのきたのかたのお、いわたりにしる所もち

「一二ウ

たれはそのあたりの物ともよひくたしてふるきいへなと  
しゆりせさせてのほりてすみ給ふとしころのおとこ  
をはかのあかしのうらにすて、む・めとつれてみや

こへのほる心のうち思ひやるへし入道はきたのかたむす  
めにすてられ又此みとせかほと袖のうへのたまともて  
なしかしつきかたしけなくなしみたてまつりし

ひめきみにもはなれたてまつる我身としよりたれは  
いつの世にかは又もあひみたてまつるへきとなこり  
かなしさとへんかたなしされ共みやこへのほり給へは

「一三オ

めてたくも思もふらんかしさてお、いにゆきつきた  
れはかわのわたりなれはなみすこく松かせさひし  
くふきはらひてふるさととしも覚すさひしく

あわれなれはあかしをけんしの出給いしおりみや  
こよりもたせ給ひしことをあふまてのかたみとて  
おき給いしをとり出してひき給ふ

《身をかへてひとりかへりしふるさとに  
《き、しににたるまつかせそふく》とよみ給いしゆへなりその

ときのごとは、みやこにかへる、かたみのこと、まつかせ  
お、いにつけへしさてその比けんしかつらにみたうをたて、  
月にふた、ひねん仏のためにおはしけりつきにかのお、  
いへわたらせ給へは月に二との御ちきりなりあかしに上は

「一三ウ

お、ゐにすみ給ひしなりかつらのつきにけんしのわた  
り給ふをみな人かつらにすみ給ふこと、りよくく

心へわくへしひめきみみつにてのほり給へはひるこのとし  
うらのなこり、こと、まつ風、月にふたたひのち

きりお、ひかつらに付へし又此まきに・たかかりと  
いふ事あるへしこれは秋の比けんしかつらへまうて給ひて  
れるのこくお、いにおはしけるおりわかつてんしやう  
人きんたちあまたこたかかりのつゐてにまいりけ

「一四オ

れはみきなとまいりて月おもしろきあたりなれはあそ  
ひ給ふこたかかりしてことり共おきのゑたにつけたる  
とあるをうるはしきおきとは心へへからすおきの

ゑたなりと心へへしかつらお、いに付へしそのことは  
かつらのさと《あかし  
たていし》お、いかわ、こと、かたかけて  
かわつら、おのひと、にしきを返す、あかし《かのきし  
うき、》

こたかかり、おきな《ほのまつ  
あるし、いひのあるしなり》うかい  
あまのさへつり、ことりかり、おきのつと

「一四ウ

第十四うすくも《うすくもか、るみ山の夕こそ  
わか身にしむれ花とりのこそ》  
此まきをうすくもという事うすくもの女あんかく  
れさせ給てのちけんしよみ給ふ《いりひさすみねゆた、よふうすくもは  
ものおもふそての色そまかへる》

この歌のこゝろはか、やく日の宮ときこえしふちつほの宮  
その比しゆしやうはけんしのしのひての御はらにまうけ給いし  
御事なれ共いんゆめにもしり給はすしてことのほかには  
いとをしみにて、年十一にてみをつくしのまきに・御くらいに

つかせ給ふこのうすくもの女いんと申はふちつほの事なりか、  
やく日の宮もきこへしけんしのけいほにしのひ給ひし

「一五オ  
御ことなりさて御は、か、やく日の宮もちうくふよりねういん  
のせんしつかせ給てめてた・し御事也御とし卅七にてかくれ  
給ふ比は三月の事なりてんかりやうあんなりみかとはしめ

たてまつりてなげきの色ふかしとりわけけんしの心の  
うち思ひやるへし大かたのよはかなきをたにも心ふかく

おほしめしなげかせ給ふ心なれはましてわすれさせ

給はぬむかしの御心つくしいまはうきよのなこりたに

もなきこ、ちして人めには大かたの事にて御こ、ろの

うちはおもひやるへしふかくさの山のさくら心あらはとなかめ

給ふゆふくれのそこはかとなく夕つく日のさすに

まかせてみねのくものうすすみなるやうにて我か御

そての色にまかひければよみ給ひしゆへにうす

くものまきという此ねうゐんをもうすくもの女いん

と申つたりされはうすくもとあらは夕くれの袖

の色か、やくひかりなと付へし又此まきにあめか

したにさとししけく月日のけ色もくものた、

すまひまでもふしきなること共ありしほとにお

ほしめしなげかせ給いて御いのり共ありしに此 「一六才

ねうゐんの御おちにておはしまししそつとのおふやけ

の御ちそうにてよいにまいり給ひしか人きかぬまに

かのけんしのきみの御こにておはします一たひの事

おやのおんよりもおこることなれはおやしらしめさ

て雨か下おたやかならずと申さたし付るにより

てみかと大きにおとろきおほしめしてその色

をけんしにも申されてた、御くらいつき給へと

おほせられしかともいか、さることはんへらんと申て

たかゝるに御心の中は心へてよはのちまでもしつか也 「一六ウ

しなりその御こ、ろのとをりにてこの御よにけんし

三十九の御としふちのうらはのまきにいんかうかふらせ

給ひて六てうのぬんとさてこそ申けれそのことは

心のうら しくれかちなる よしの、さと こ 《かたこと  
ひなあそび》

まかり申へいと申也 つかさ かふり 《ういかふり  
なり》 はるあきのあ

らそひ 《からにははる  
わかつてうにはあき》 我身にしむる かみもほとけも

ゆるせかし かつらかわ 《ほたる  
か、りひ》 やりみつ

#### 第十五あさかほ

あさかほのさいゐんとてしきふきやうの宮のひめき 「一七才

みかものいつきのみやにておはしまししかおりゐさせ

給ひてせんさいゐんと申て御わたりありしなり

此さいゐんをけんし御こ、ろにかけさせ給ひし也

しかりといへともつゐにあひ給はす心つよくてた、

やみ給ひし人也此まきをあさかほとなつくことけん

しの御歌に 《見しおりの露わすられぬあさかほも  
花のさかりはすすきやしめらん》

とよみ給ひしゆへなりかのさいゐんかものいつきにて

おはしまし、時かみのいかきの中までも御心につ

て申かよはせ給へともおりふしのなさけかましき 「一七ウ

御かへり事などはにくからすきこえさせ給へともつ

いにこ、ろつよくしてやみ給ふおりゐにならせたま

ゐてのちは御おはのとふゑんのみやにいんしよにす

み給ひし也しかればあさかほにはその又心つよきなと

いふ事を付へしけんしことのほかにせちに申給ひ

しかとも心つよくてのちにはつゐに御くしおろして

あまになり給ふ女はうの心つよくて又やさしき

ためしに申つたへり しなどのかせ 《おふかせ也》 ゆめにみなして

かれたる花 ゆきまろはかし 「一八才

第十六おとめ 《ふちにつくふみ むらさきのかみ 二すみ ともよふかり  
なみたのこいて うすすみ也 ともおかひめわれはかほなり》

此まきをおとめといふことかものりんしのまつりをたいり

にてつとめさせ給ふところは十一月なり二十よりうち

のおんなをそろへててん人のすかたに出したて、ま

いひめとかうしてたいりへまいらすることなるに此事



をけんしつとめさせ給ふ所に御めのとこのこれみつか  
ひめを出したて、まいらせ給ふにしのひてのそき給いて  
むかしけんしの若おはしまし、おりまいりしおとめを  
しのひおほしめしていまたわすれかたくおほしめす人

「一八ウ

ありおほし出しければいまはとしふりぬらん我としふり  
ぬとおほしめして御歌に《おとめこかみさひぬらんあまつそて  
ふるきよのともよわひへぬれは》  
かくよみ給いしゆへなりさておとめといふ也さて此これ  
みつかひめはそのまゝ、たいりにとふないしのすけとてさ  
ふらはせらるこれそけんしの御こあふひの上の御はらの  
若きみのちにはゆふきりのたいしやうときこえし  
かこのまきによりときくみなれ給いてあまたの

「一九オ

御こともうみたてまつりし人なり此あいたのことはに  
いわくおとめとはかつらの事なれはいかにもしんきの  
心をしるへし又此つほねに夕きりのたいしやう十二  
にてけんふくありその比よりしておちのない大しんの  
御ひめ十四五はかりなりしをうはのおふみやのもとにて  
おひたち給ふをおさなき心にふかくこゝろかけてこ  
いしのひ給ふほとにひめきみもしつ心なきもろこい也  
こゝに御・ちゝきゝ、つけ給いてあやなくひきのけてひめ  
きみをは我か御もとによひとり給ふ此ひめきみこゝろ  
くるしくおほしてあるよのねさめにくもひのかりも

「一九ウ

わかことやとしのひやかになかめ給いしをかの夕  
きりたちきゝ、ていと、おもひまさりしなりつゝ  
ふちのうらはのまきにおと、心行てむこにとり  
てめてたかりし也そのことはに くもひのかり ねさぶ覚  
もろこい おさなきほと心のつくし 又此人、のこと  
とにろくすくせといふ事はんへり何事そといふ  
に此人、ある時いかなるひまにか一所にて物かたりありしを

このくもひのかりのめのとほらたちてゆふきりその比い  
またろくすくにておはしけるに此ひめきみをはとう  
くふにまいり給はんとかしつき給ふことなればなとや  
またしきにろくすくせとほらたちしなり返、

「二〇オ

ゆふきりのたいしやうのきたのかたをはくもひのかりと  
心へへしその比秋なり又このつほねにけんしのおと、  
六てうのきやうこくわたりに四ちやうまちをしめて  
とのつくりしてかたへの女はうたちをわたしきこえ  
給ふこゝろくみなれ給いてわをつくり給ふまつみなみ  
にはむらさきの上の御かた春のあけほをしめてはる  
のきくさをうへらるさてこそはるの御かたとももの  
かたりのおもてには申けれ花ちるさと、きこへしは

「二〇ウ

なつの御かたにてさうひはたんふちつ、しなとをううゑられ  
たる花ちるさによそへておもしろくむめつほの  
ねうこと申は六てうのみやす所の御むすめけんしの  
御やしないの御むすめなれはうちより出給ふ御さとの  
ため也此女このきみ秋のゆふへをしめ給へは秋  
のをうつしてよろつのくさ花こたかきもみち色  
をましてことにおもしろしきたおもてには

あかしの御かたかつらにおはしまし、をうつしたて  
まつり給ふゆかれのの・山のけしきこよふのまつ  
のゆきのあしたまことにまとのすたれもあけぬ

「二一オ

へしことにすこくおもしろしさるほにかたゝ  
とのつくりめてたくしてあかしくらし給ふ所に女こ  
の御かたより色あるもみちをはこのふたに入てうへわら  
わをつかいにてむらさきの上の御かたへ秋の比の御歌  
《こゝろから春まつそのはわかやとの  
もみちのかせのつててもみよ》との給いおくり給ふされはこのつ  
ほねにかせのつてもみちなどいふことあるへしそのつきのほ

る又むらさきの上の御かたよりかの女このあきの御かたへこそ  
 のもみちの返しにこれも花をいわねのまつにとりくして  
 こそのことくにわらはして御つかいあり御歌に

「二二ウ

《花その、こてうをさへや下くさの  
 秋まつむしはうとくなくらん》とおくらせ給ひしかはいとおもし

ろき心とも也かやうのこと葉はおとめのまきにある事  
 なれはくもひのかり又はおとめ心へへし也此花も  
 みちのとのうつりはにわのうへきうゑくさしきの  
 ありさまとりくにおもしろさふせひなり

第十七たまかつら 《ふなことも かねのみさき まつのうら すへのなきとど  
 あさ花た つくし しみつのおてら

此まきをたまかつらといふことむらさきの上の御かたにた  
 まかつらのひめきみつくしよりのほり給いしをうこんはつ  
 せにてまいり合てけんしのおと、に申たりしかはむかい

「二二オ

とりてもてなしかしつき給ふをむらさきの上いかなる  
 すちの心ねにてかとうたかひ給ひてよみ給ひし歌に

《こいわたる身はそれなからたまかつら  
 いかなるすち たつねきぬらん》さて此たまかつらといふはゆふかほの上

はかなくおくれ給いしこととはふれともはすれ給はす  
 さまく人を見給ふにもあへなくさえはてし露のよす

かの心にかゝり給ふにかたみにつかへ給ふうこんはかりは  
 かなしくていかにしてかかのかたり給ひしなてしこを

たつね出したてまつらましとおもひわたり給ふかの 「二二ウ

ひめきみ御としよつにてつくしへめのとにつれられてく  
 たり給ふさまくそたち給ふほとにかたちもかたちしけなく

いづくしくおひたち給ふ程にめのとあわれにいたはしく  
 もてなしかしつきたてまつるかひなくめのおとこに  
 わかにいのちつきぬいふかないなくなくてめのおとは  
 こくみたてまつるほとにならひのくのしゆこすてにひとり  
 してむこいりせんとすこれにおそれ給ひてかなしみ給ふ  
 ほとにめのと二人してとかくかまへてきやうへのほせたて

まつり御とし廿三これをつくしのほりというかの 「二三オ

たいふのしやうけんおいての舟をやたてんすらんとお  
 そろしく思ひ給ひてはやふねにてのほせたてまつ  
 りしなりこれをつくしのほりのはや舟とはいひ

なりそのことは はたとせ はや舟 つくしのほりな  
 と、付へしかくてうこんはつせてらにてまいり  
 あひてけんしに申てむかへておきたてまつりひけ  
 くろのきたのかたになり給ふうちのなしいしのかみ

かけ給へはたまかつらのなしいしのかみと申なりはつ  
 せてらへまいり給ふ事はきやうへのほりてしる人なく  
 ち、おと、にもいま申さす又けんしのおと、

「二三ウ

もしりたまはすうをのくかばかりとりのすをは  
 なれたるやうにかなしくてほとけの御しるへをたのみたて

まつりはせへかちにてまいるにうこんもまいり合たりし  
 なりされはつくしのほりにはせまいりと付へし此ひ  
 めきみのおさななをるりきみという又きぬ

くほりという事いつれのまきにあるそといふ

ことあらは此たまかつらのすへにありしはすの事すへ  
 にけんしの御かたより御かたくへ正月の御しやうそく

「二四オ

をくはらせ給ふまつむらさきの上にあか色御ひめきみ  
 の御かたへこうはいたまかつらの御かたへくれなひあかし  
 の御かたへしろききぬ花ちるさとへ花たすゑつむ

はなの御かたへやなきいろうつせみのあまのもとへくち  
 なし色のきぬ也これをきぬくほりというなり

此まきにあれはとてつくしのほりはや舟はつせ  
 などにつくへからすきぬくほりのことをいわんに  
 わたまかつらくれなひの色ふかくなど、いふ事  
 をはことによりてつくへし此まきならすきぬ

「二四ウ

の色にかとりゆるし色いまやう色など、いふ事  
ありけしからぬひしと申かとりとはみついろの  
す、しなりかちやうのことくなればかとりといふ  
いまやう色とはこうはいをいふゆるしいろとはこう  
はいのこきくれないよりはちとうすけれどもゆる  
すといふ也ねりぬきはいみしくわしよくの物  
なるをゆるすといへり又おちくり色といふ事あり

これ又ひし也これはこきくれないの色也此まき  
のことはに ふなこ すへのなまき かねのみさき しみつの御寺 まつら つくし

「二五オ

ならひはつね一

あさ花た

此まきをはつねといふことあかしの上の歌にひめきみ  
のむらさきのおんこになりておはしませはみたてま

つることもなくて正月一日にかの御かたへ文まいらせ給へり

その歌に《とし月をまつにひかれてふる人に  
けふうくひすのはつねきかせよ》とよみ給ひし

ゆへなりこよふのまつゑたに此歌をかきてつけて

まいらせ給へはこよふの松うくひすのはつねつけ給ふ

へし又このまきにはかためのもちいか、みの事あり

むらさきのうへにけんしみせたてまつりしなりそのとき

「二五ウ

の歌《うすこおりとけぬるいけのか、みには  
よにくもりなきかけそなてへり》とよみ給ひしなり

此こ、ろをとり合てはつはるのいわひなれば付へし

わかぬ《ひげに》す、りのあたり たきのよとみ かさしのわた

ならひこてふ二

このまきをこてうといふことはむかしはいんみやいち

の人きさきなどの事もしきにことくとていかめしき

ほうゑありにんわうきやうたいはんにやきやうともいへり

秋このちうくふ六てうのゑんにておこなはせ給ふそのつ

きにむらさきのうへほとけに花をたてまつり給ふとて

「二六オ

ちうくふの御かたへ花たてまいらせ給ふとてわらはを

出た、せてすいひんにさくら山ふきをたてて・まいらせ

給ふこてふ花そのへまいりてゑるとありおとめつほねに

はるまつその、御返しはなその、こてうをまつやと

申おくり給いしも此まき□なれはこてふというさて

此まきゆにふなあそひこふねうかへてみかと御心行ていと

おもしろかりし事これ春としるへしあなたう

と《さいはらく》こ舟あそひ こてふ《花その》山ふきのま□せ

ならひほたる三 「二六ウ

此まきをほたるといふこと歌に《こみはせて身をのみこすほたるこそ

このこ、ろはたまかつらのきみをむかへとりたてまつり

てかしつき給ふほとに心にかけて給ふきんたちいとお、

し中にもけんしのおと、ひやうふきやうの宮此き

みをかきりなく心にかけて給いて五月四日の夜し

のひておはしましたるにけんしかのひめきみたち

のかたちのすくれておはしますをみやに見せ

たてまつりとりあつめてきちやうのかたひらにつ、み

てひかりをさとみせてほのかにみせ給いし也かの 「二七オ

かつらのしんわうに心をかけしめてこそ月のひかり

をまちかねてほたるを袖につ、みけれといふふるき

ためしによそへたりかのかつらのしんわうときこえし

人はせいかう天わうたいしの御こひわのしやうすそ

かしこれもきりつほのみかたとに大ことかけりひはひき

とありおもしろしこれにはきちやうのすきかけのほ

たる又あやめのしつくほたるのかけにてほのかにみし

なといふことと心へし五月四日の事事なり此ま

きのことは《いけ水 あやめかさねのふみ こよなれたる》 「二七ウ

ならひとこなつ四

このまきをとこなつといふことたまかつらのきみ

のすませ給ふ御かたをはにしのたいといへり此御かたの  
にわにはなてしこをからのをも山ゆをもと、のへてう  
ゑわたされたりかの雨のよの物かたりにち、おと、此ひ  
めきみをなてしことかたり出すゆへ●にやと□□おもしろ  
しけんしのおと、をはしめたてまつりわかきんたち  
此御かたにてすさましくてあゆのいしふしかもかわより  
たてまつりたるを御まへにてと、のへしてまいり給ふ  
このちかきかも河まかづ□□あゆのうを也はにしかはなと、いふ事  
あるへしそのおりなつなりいかにもすさましき  
ふせいづくへしそのゆへになてしことうんく

「二八オ

ならひにかゝり火五

此まきをかゝり火といふ事けんしたまかつらを御こに  
してもてなし給ふといへ共まことの御こならねは  
心中にはむかしの御かたみにも見たてまつらばや  
とおほしめしいれてなつのよの月おそくいづる比  
御まへにかゝりひともして御ことおしへさせ給ひ  
ける時の御歌に《かゝり火にたちそふこいのけふりこそ  
身よりあまれるおもひなりけれ》  
とよみ給ひしゆへなり御ことをまくらにしてもろ  
ともこそひふしてよみ給ひし也此心にてかゝり  
ひ□にことをまくらにして夕やみ こいのけふり  
秋のはつかせ おもひ返る たまかつらなといふ

「二八ウ

ならひにのわき六

此まきをのわきといふこと八月にはおふかせふきてさ  
かしくしよくのついちすきかきむねのかわらなとふ  
きちらしてすさましくおそろしかりしなりそうして  
あきはかせふく時なるかゆへに秋八月のかせをはのわ  
きといふなりけんしの御こ夕きりのたいしやういまた  
ちうしやうにておはしまし、比なればかのくもいの

「二九オ

かりとよみし御いとこのひめきみの御かたへまいり  
給いてすゝりかみこいてかのくもいのかりへ文つか  
わし給ふそのおりのかみの色むらさきのうす

やうその歌に《風さはきむらくもまよふゆへにも  
わする、まなくはすられぬきみ》のはきと

いうこと此歌の心なりかるかやむらさきのうす

やうすゝりかみなど、いふ事あるへしさてのわき

「二九ウ

のあしたけんししよくへかせのとふらひに出させた

まひしなり中にもあかしの御かたへおはしましておふ

かたのかせのとふらひはかりにてつれなくかへり給ふを御

らんしおくりてなさけなくおほしてことをほのかに

かきならしてあかしの御かたの歌に《大かたのおきのはすくる風のおとも  
わかみひとつにしむちして》

とよみ給ひしおもしろき心ね世のわきのあき風

のとふらいおきのはすくるかせなど、心へて付へし

のはきにむらさめふりたりし也しるへしあめとい

いてもくるしかるましきなり 「三〇オ

ならひにみゆき七

此まきをみゆきという事此みゆきはの、み行也  
さて御ゆきといふしゆしやうはかのけんししのひの御こ  
れいせんゐんにておはしましき比は十二月におふはらのへ  
みゆきし給いしなりたかかりなればそのことはに  
みゆき おしほ 山 ゆき きし ふるきあと  
など、いふ事あるへしけんしのおと、はみゆきの御  
ともなした、のこりきしをたてまつり給へる也

ならひにふちはかまハ 「三〇ウ

此まきをふちはかまといふ事夕きりの大しやう

のうたにたまかつらのないしのかみのひけくろの御もとへ

もうつり給はてにしのおはしまし、おりよみ

給ふ《おなしの、露にやつる、ふちはかま  
あわれをかけよかことはかりに》とよみ給いしゆへ

なりその心はその比のせつしやうくわんはくはけんし  
のむかしのこしうとあふひの上の御あにそかしかの夕  
きりにはは、かたのおち此くわんはくの御は、宮はき  
りつほのみかとの御いもふとけんしには御おは夕きり  
の御ためにはうはなりたまかつらのひめきみにも御う  
はそかし此みやかくれさせ給へは申しやうもひめきみ  
もふくとてくろききぬをきせ給へりその比御ふくは

「三二〇

てはうちのないしのかみまいり給ふへきにてうちより御  
つかいにかのちうしやうをたてまつり給ふした心はゆ  
かしくおは・ぬ（せ）にもあらさりければうちおほせ事つか  
わしはんへるらんといひなしてその、花のいとお  
もしろきをみすのうちへさし入て此歌をよみ

て御てをいさ、かひきうこかしたり此心をゑてふち  
はかまといふ事あり 「三一ウ

ならひにまきはしら丸

このまきをまきはしらといふ事はたまかつらのひめき  
みうちのなしいしのかみかけてひけくろの大しやうのきた  
のかたになり給ふ我御とのへうつろはせ給ひしかはもとの  
うへを出させ給いしにその比十二三になり給ふひめき  
みおはしけるか出給ふとて此歌をかきてまき・はし  
らすこしわれたるなかへかうかいのささしてお  
し入て出給いし也《いまはとてやとかれぬともなれきつる》  
とよみ給ひし時のかみの色ひはた色なりさてこそ  
まきはしらといひけれひわたのかみのまきはし  
らと付へしさて此まきにひとりのはいといふ事  
ありこれそ此まきのめいくなるたまかつらへ此ひけくろ  
かよひ給いしにもとのきたのかたはけんしのおと、の  
なへてならずおもひたてまつり給ふむらさきの上

「三二一オ

にはへつふくの御あねしきふきやうの宮のおふひめ

きみにてよのおほえおろかならずしてあなつりにくき

御事にて御こともあまたおはしければたいしやうもな

へてならずおはしける程ほどに何となくさやうのかた 「三二一ウ

より御なかもあくかる、さまなるに此たまかつらにかよ

いそめては又おのこのこ、ろいかならんうつろいはて

やすき心もなしきたのかたいたのとやかて我か

御身のほと心へはてさせ給てもろ共に出立なとして

やり給ひしにれいの物、けのわざにや大なるひとり

にひをとりにほひして出なんとほのめき給ふ

おりさらぬやうにておき出、ひとりをなけさせ給ふほとに

はいもたちこほれ御そもやけこほれなんとせし也

それよりいと、うとましくなりてつゐにかくはなれ 「三二一ウ

給ふ此ことはにひとりのはい物、けうとむなといふ事

付へしきたはふゆなり又此大しうやうをひけくろ

といふ事いみやう也御ひけくろくおはしまして

みさまけんしなとのことくうつくしくはあらさり

ければ申なりされ共おしなへての人ならずよ

したかひもめやすくしてのちにはくわんはくにて

なひしのかみきたのまん所かけていみしくて

さかへ給ひし御ことなりさてかしわきのゑもんのかみ

いまたとうのちうしやうときこへし比たまかつらの 「三二一ウ

ないしをわか御いもふともしらすして心をか

給いてよみ給ふ《おもふともきみはしらしなわさかへり》

とよみてたてまつりしなりこのゑもんのかみをはさて

こそいはもるちうしやうとも申けれさやうの事いふ人

ありともあらかふへからすかしわきとのゑもんのかみと

たまかつらとはおと、いにておはせしをしらせ給はて

いひより給いし也

第十八むめかえ

此まきをむめかへといふ事正月廿日比けんしのおと

「三四オ

との六てうのぬんにてたき物合ありこれはあかしの

はらの御むすめとうくふにまいり給ふ御出立の比かともを

御かたへへくはりていとみあわせ給ふせんさいぬんと申

わかあさかほのさいぬんけんしには心つよくてやみ

給いし人なり此御かたよりちりすきたりしむめ

かえに文を付てこうりのつほにたき物をおさ

めてこよふのゑたのゑにはんへりつ、又おもしろき

つほにもたき物を入れてさくらかへに付られいひつけ

たるいとどさまならひなくゑならずおもしろくしな

「三四ウ

されなりその歌に《花のかは<sup>ちりにし</sup>葉<sup>は</sup>たにとまらねと

たきものといふ事あらはこよふのまつにつけられし

文など、いふへし又ちりすきたりしむめかへにいひ

つけたりいとるりのつほなどあるへしやかてそのよかの

ほたるのひやうふきやうのみやをはんしやにてからのたき

ものを心みさせ給ふたき物色、むめの花くろほふを

はむらさきの上あわせ給ふはなちるさとししゆけんし

いろくさまくに出させ給ふたき物いつれもとりくくに

おもしろき中にもむめの花はその比のおりにあひ

「三五オ

ておもしろしとさためられけりみきなとまいりて

宮かへり給ふ御おくりものにたき物をたてまつり給へは

みや御歌に《花のかを<sup>な</sup>ならぬそてにつ、みもて

けんし御くるまにたてまつり給ふ

《めつらしとふるさと人もまちそみむ

いふ事に此歌の事付へし又たき物にも、あ

ゆみといふ事ありこれはとをくまてにほふ心ね也た

きものなにてはなし又たき物をみかわみつにうつむ

事ありそのゆへはたきものを合てはなつふゆにかわり

てうつむ事ありくわしくはむめかへのつほねにあかせ

りむめたき物はたえむめはななれはむめかへといふ

第十九ふちのうらは

此まきをふちのうらはといふことくもひのかりのひめき

みをゆふきりの大しやうみそめ給いしむかしより

思ひそめてとしをふるにひめきみのち、おと、ゆるし

給はさりしかともさてしもあるへき事ならねは

ゆるし給はん心にておと、の御いへにふちのさかり

にちうしやうをよひきこえ給ふけんし御あそひなど

ありてさかつきのつゐてにおと、ふちのうら葉の

「三六オ

事をぬいし給いし也此歌ほんかに《あさひさすふちのうらはのうらとけて

といふうたの心也まことに思ひ給は、むこにとりなんの心

なれはさほいなくむこにとりてみつももるましく

めてたしのちには三てうの上と申せしはくもい

のかりの御ことなりあまたの御ことも出き給ふ比は

四月なりさてやかておなし月にあかしのうへのひ

めきみとうくふにまいり給いて御つほねむかしのきり

つほ也御とし十二むかしのかういの御つほねなれは

けんしの御さうそくなりしけいしやと申き御お

「三六ウ

ほへいかにおろかならんやあまたのみやたちの御は

は一のみやはとうくふにたち給ふあかしのちうくふ

とは此御事也かくてそのとしけんしのおと、御と

し三十九にて大しやう天わうのせんしをかう

ふりて六てうのいんと申けりくらしいをきはめ給ふ

御事なれはさしあたりてめつらかにめてたしやかて

そのあき六てうのいんへみゆきなしたてまつり給ふ

御このゆふきりその比さいしやうなりしをちうなこん  
「三七オ

になさりいつくまでもふちのうらはのまきはけんし

の心行てよろこひ給いたるまきなり又みゆ

きのおりおもしろかりしはその比のいんと申は

御あにしゆしやくいんにておはしますしゆしやうわ

人こそしらねとも六てうのいんの御これいせんいん

にておはしますこさはなんいんにてあるへきをけん

しなをひけし給いて大しやう大しんのこさ

にせられたりしをしゆしやくいん御らんしてい

かゝとあるしの御さをなをさせ給ていんの御さ

とひとしくせさせ給へりかやうの事心へへし

「三七ウ

（以下空白）

「三八オ